

煉瓦と戦艦・泉州がささえた国防の最前線

山岡 邦章

大阪湾の南端に位置する紀淡海峡には、旧陸軍が煉瓦で構築した由良要塞(兵庫県洲本市)があります。ここには岸和田をはじめ泉州を代表する煉瓦会社が煉瓦を納入し、要塞を構築していました。この要塞は逼迫する情勢に備える近代要塞として明治政府が整備したという性格上、当時の最高技術と資金を投入した煉瓦構造物であり、巨額の投資をした砲台が現在も遺構として残り(図1)、当時の緊迫した状況を知る上での貴重な歴史遺産です。



図 1. 和歌山市友ヶ島に残る砲台砲座

要塞は淡路島の由良、鳴門(徳島県鳴門市)、加太、深山、友ヶ島(以上和歌山県和歌山市)などに砲台を、その周囲に堡壘砲台を築き、東京湾要塞、下関要塞と並んでの一等要塞として、重要都市大阪の防衛にあたりました。この要塞は紀淡海峡という狭いエリアに国内最高密度の火砲を備えており、当時清国のものであった旅順要塞への砲撃で有名な 28 cm 榴弾砲をはじめ、27 cm 加農砲など曲射、平射弾道の重砲を複数種類配備していたため、複合して重なり合う射程距離と有効射界をみれば、当初の敵国である清国はもちろん、日露戦争当時のロシア艦隊がこの海峡を無傷で突破し、大阪を強襲するのは極めて困難なものです。

これらの砲台遺構は由良地区などでは終戦直後に破壊を受けたものもありますが、友ヶ島、加太・深山地区などでは現在も比較的良好に残ります。煉瓦の使用にあたって耐弾性確保のための厳格な築城基準や仕様があり、また築造開始年代や資材運搬などの条件から、これらの要塞に岸和田煉瓦をはじめ、地元泉州の煉瓦製造会社の煉瓦が使用されていることはその品質を知るうえで極めて重要です。

明治維新以降、急激な近代化を遂げた日本でしたが、明治 10~20 年代では、国力と海軍力の不足は絶対的で、初期の仮想敵国である清国の北洋艦隊に対抗できる艦隊は編成できなかったのです。そもそも戦艦



図 2. 砲台（神奈川県・写真は模擬砲）

自体をイギリスなどから購入していたのですから、その実力は欧米列強を超えるものではありません。明治 19 (1886) 年の長崎事件、同 24 (1891) 年、25 (1892) 年の清国の戦艦、定遠、鎮遠による「砲艦外交」は日本には脅威であり、軍事的劣位を痛感することになります。すでに明治 18 (1885) 年には東京湾に猿島砲台 (図 2) を、同 22 (1889) 年には淡路島の由良、生石山で砲台を完成させていた日本ですが、この砲艦外交以降、東京

湾内に人工島の海堡、紀淡海峡、関門海峡と、

この 3 か所で砲台群の構築を加速させます。しかし、日本ではこれまで巨砲を搭載した戦艦からの攻撃を防御する近代的な砲台は構築されたことはなく、一からの試行錯誤で建設されました。そこに岸和田をはじめ泉州で焼かれた煉瓦が使われたのです。煉瓦が国防の最前線に立った時代でした。

つまり、明治時代前期、日本では欧米列強に対抗できる戦艦は造れなかったのですが、煉瓦は作れたのです。日本の煉瓦造要塞は、不足する戦艦隊の代用であり、日清戦争当時、そして海軍力を増した日露戦争当時でも、連合艦隊として決戦艦隊を 1 セットしか用意できない劣位の島国が、国土を盾にロシア極東艦隊、そして押し寄せるバルチック艦隊の 2 つの戦艦隊の脅威に対抗する最期の手段が、煉瓦の要塞だったのです。いまでは考えられませんが、泉州、岸和田の煉瓦が国防の最前線を担っていたという時代があったこと、知っておいてもらいたいのです。

(やまおかくにあき 岸和田市郷土文化課)

タコのおもやま話～特別展「タコの王国」の展示内容より

風間 美穂

2019 年 11 月 16 日から 2020 年 1 月 26 日まで、きしわだ自然資料館では特別展「タコの王国」を開催しました。会場は入口から出口まで、タコやタコに関連したものがたくさん並びました。展示では、みなさんにはおなじみのタコのことをもっと学んでいただけるよう、生物学的なことにとどまらず、タコをとるための漁具や民俗学、考古学から見たタコと人の関わりなども紹介しました。今回はその内容の一部を紹介します。なおこの展示は、船の科学館「海の学びミュージアムサポート事業」プログラム 1「海の企画展サポート」の支援を受けて実施しました。

日本近海にすむタコの種類

タコと聞いて連想するのは、やはり食べ物でしょう。たこ焼き、酢のもの、にぎり寿司など食べ方は多様ですが、日本で一般的に食べられているタコは、マダコやイイダコ、ミズダコなど 5 種類ほどです。日本のタコはこれくらいしかいないと思われるかもしれませんが、じつは日本近海に生息するタコの仲間は、現時点で約 60 種も知られているのです (具体的な種名は、今回同封した『タコの王国ミニガイド』をご覧ください)

ください)。今回の特別展を開催するにあたって、当初は日本近海のタコ全種の展示を目標にしたのですが、準備を進めるうち、日本ではこれまで数個体しか見つかっていない種がいくつかあることがわかり、実現することはできませんでした。しかしそれでも、JAMSTEC（国立研究開発法人海洋研究開発機構）から写真や動画をお借りし展示したことで、めったに見られない深海にすむタコの生態をご覧いただくことができました。また、茨城県自然博物館からお借りしたメンダコの模型も人気でした（図1）。



図1. メンダコの模型（茨城県立博物館所蔵）

日本最古のタコツボは泉州地域から

タコをとる漁具として有名なタコツボは、現在も日本各地で利用されていますが、日本最古のタコツボは、全国有数の弥生時代の大集落遺跡「池上曾根遺跡」（和泉市・泉大津市）から発見されており、今から 2,400 年前のものと推測されています。今回の展示では、この日本最古のタコツボも実物を展示しました（図2）。大きさは高さ約 10 cm、直径約 7~8 cm 程度であることから、イイダコのような小型のタコをとるためのものだったと考えられています。このタコツボは、稲作のはじまった弥生時代から見つかっていることから、稲作とともにユーラシア大陸からわたってきた技術のひとつであるように思えます。しかし、今のところ朝鮮半島や中国大陸の遺跡で同時代のタコツボ土器が発見されていないことから、タコツボ漁は日本、それも泉州地域で考え出された漁法だと考えられています。



図2. 日本最古のタコツボ（和泉市教育委員会所蔵）

タコをとる方法はタコツボだけではない

今回の展示の目玉として、日本全国のさまざまなタコツボを紹介するコーナーを設けました。日本各地で現在も使われているあるいは過去に使われていたタコツボを、一堂に集めて展示しました。しかし、タコを漁獲するための道具には、タコツボしかないわけではありません。北海道や日本海側の東北地方では、大型のミズダコをとるために「タコバコ」を使っています（図3）。また最近では、タコツボより軽量なカゴを使った「タコカゴ漁」、タコ以外もいっしょに捕まえる「底引き網漁法」で漁獲することが多くなっています。

ちなみに大阪府では現在、タコツボ、カゴワナ、底引き網でタコを漁獲しています。日本のタコツボ漁発祥の地とされる泉州地域ですが、現在もタコツボ漁業を行っている漁師の方は、泉佐野（泉佐野市）、岡田浦（泉南市）、下荘（阪南市）、深日（岬町）の各漁協にそれぞれ 1~3 名しかおられないとのこと。しかも、その多くはタコツボを冬場しか使っておらず、他の季節にはタコカゴで漁獲しているようです。

タコツボを使う漁業者が年々減っているのは全国的な傾向で、大阪湾でもそれは同じようです。

タコは人気者

味がよく、姿や動きもユーモラスで、身近な海で見ることができるタコは、絵画やおもちゃ、物語などに頻りに登場します。物語中のタコの行動は、馬や牛、人を海に引っぱり込んだり、上陸して畑でナスやキュウリなどの農作物を盗んだり、仏像やご神宝を抱えて上陸したりするなど、悪いことからよいことまで多岐にわたっています。また、蛸阿弥陀や蛸薬師などタコを祀るお寺や神社が日本各地にあり、信仰の対象にもなっています。岸和田市内でも、天性寺の蛸地蔵伝説のほか、夜疑神社（中井町）で毎年9月に行われる「蛸座」の行事など、タコに関連した風習が伝わっています。

現在でもタコは、水産物の地域ブランドとして各地で登録されているほか、赤くて末広がりな姿や「たこ＝多幸」といった言葉のひびき、慣用句「ひっぱりだこ」からくる商売繁盛のイメージから、町おこしのシンボルとして日本各地で活躍中です。

特別展「タコの王国」はすでに終了していますが、その展示内容の一部をまとめた「タコの王国ミニガイド」は現在も配布しています。今回の fromM に1部ずつ同封していますので、興味をお持ちの先生方はぜひご覧になってください。

(かざまみほ：自然資料館学芸員)

Information

●きしわだ自然資料館・臨時休館のお知らせ

2020年4月7日(火)に緊急事態宣言が発令されたことにともない、きしわだ自然資料館は4月8日(水)から5月6日(祝)まで臨時休館いたします。5月7日(木)は通常の休館日ですので、再開されるときは5月8日(金)からになります。状況によっては休館をさらに延長する可能性があります。

なお、岸和田城とだんじり会館も4月7日(火)から当面の間休館します。詳細はホームページまたは、各施設にお問い合わせください。

●きしわだ自然友の会 会員募集

きしわだ自然友の会は、自然資料館と協力し、独自の行事や出展、会誌などを通して自然を楽しく学んでいる団体です。自然が好きで、生物や地学をもっと楽しみたい・学びたい人は、ぜひご入会ください。授業・学校園の授業に活用できるプログラムもあります。

- ・対象：身近な自然に興味のある個人・家族
- ・期間：4月1日～翌年3月31日
- ・費用：個人会員年間2,000円（中学生以上の方が1人で入る場合）、家族会員3,000円（同居家族全員が対象）、特別会員年会費10,000円（友の会を援助してくださる人・団体）

※お願い [fromM]は、学校教職員に1部ずつお配りください。

担当の方は忙しいところ申し訳ありませんが、よろしくお願い申し上げます。

【from M】では、みなさまからのご意見、ご感想、ご質問等をお待ちしています。博物館での学習、研究等に関する情報、地域の自然環境や歴史に関する面白いトピックスなどがありましたら、ぜひご投稿ください。お名前、連絡先、所属等をご記入の上、右記の宛先までお送りください。電子メールでも受け付けています。

連絡・問い合わせ先

〒596-0072 岸和田市堺町 6-5 きしわだ自然資料館
TEL: (072) 423- 8100 FAX: (072) 423- 8101
Email: sizen@city.kishiwada.osaka.jp
自然資料館ホームページ URL:
<http://www.city.kishiwada.osaka.jp/site/shizenshi/>
(googleなどの検索で「きしわだ」と入力し、検索すれば、簡単です)